春日横丁ラプソディ

第一話　ほどける夕暮れ

かん、かん、かん、かん――

お店入口(おみせいりぐち)の硝子戸(がらすど)の向こうから、すこし間延びした踏切の音のリズムが聞こえてくる。

籐椅子(とういす)に座ってうつらうつら船をこいでいた一之江(いちのえ)初穂(はつほ)は、その音にはっとわれに返った。

「あわわ……！」

唇のはしにこぼれかけていたよだれを指で拭(ぬぐ)うと、初穂はぱちくりとどんぐりまなこを見開いて店の中を見回した。

右側の棚に並んだお茶用の木箱、左手の平台の上の袋入りのお茶と、ほんの数点だけだけれどワゴンに並べてある、

売り物の普段使い用な急須（きゅうす）と湯呑み。
特に異変はない、いつもの初穂の家――お茶屋『初葉園（はつはえん）』の店内風景だ。
とはいえ。
――ううう、だめだめ。居眠りとかなにやってんだろわたし……！
両手でぱちんとほっぺたを叩き、初穂はかぶりを振った。
頭の後ろでみつあみにした髪の毛が、勢いよく尻尾のように揺れる。
お母さんがちょっと商店会の用事があるので、中学校か

ら帰ってきての留守(るす)番役を仰せつかった今日の初穂である。短い時間とはいえお店を任されたというのに、どろぼうさんにでも入られたら大ごとだし……お母さんが帰ってきたときにぐっすり寝こけていたりしたら、さすがに今後安心して留守をあずけてもらえなくなってしまうだろう。

椅子から立ちあがり、大きくひとつ深呼吸をする。それほど広くないお店の中に満ちた、穏やかな茶葉の匂いが鼻の奥にしみこんできた。

よし、と、両手を腰にあてて初穂は唇をきりりと結んだ。

昨日は宿題が終わらなかったうえに、布団の中でラジオ

を聴いて遅くなってしまった。それゆえのこの眠気であるのだが、いまので気が引き締まった。もうだいじょうぶ。

すっかり傾くの早くなった秋の陽は、硝子（がらす）の向こうの路地をほんのりと茜の色に染めつつある。

速度を落として止まる電車の、車輪の軋（きし）みが小さく聞こえてきた。

この音は宮川線のほうかな、と、初穂は思う。

初穂園のあるこの商店街の横丁通りは、高架の上を通る私鉄の都古原（みやこはら）線・日庵寺（にちあんじ）駅と、その高架の下を潜る路面電車・宮川（みやかわ）線の春駒（はるこま）駅の間を結ぶ五十メートルほどの小路だ。

重なっているのだから交差部分に駅を造ってしまえばよかったようにも思えるのだが、そこはなんだかいろいろ経緯があったらしく、駅は別れていてついでに名前も別々だ。都古原線の駅の「日庵寺」はこの町の外れにある大きなお寺から、宮川線の駅名の「春駒」は、この地域のもともとの地名からの命名だった。

『春』と『日』を名に持つその二駅を結ぶ近道であるがゆえに――この小路は、『春日（かすが）横丁』などという実に趣のありそうな通称をいただいてしまっている。初穂の家を含めて七軒しかお店のない、ごくごく細く小さな道であるにも

かかわらず、た。
正面の硝子戸（がらす）の向こう、車は通れない幅の細い路地を、まばらに人が歩み過ぎていく。右手から左手へとの流れであるところを見ると、電車がとまったのは宮川線のほうという初穂の読みは当たりだった模様だ。
ふたつの駅は両方ともローカル線のローカル駅なので乗り換えるひともさほど多くはないのだけれど、夕方はさすがに電車が停車するたびにそこそこのひとは流れる。この町の人たちに加えて、電車の乗り換えで毎日この通りを歩く人たちが、初葉園の貴重なお客さんなのだった。

――わたしもお店の前に出て、いらっしゃいませー！とかしたほうがいいのかな……。みなみちゃんとか、日曜日にはしているみたいだし……

硝子（がらす）の向こうを過ぎゆくひとの姿を見ながら、初穂は考える。横丁の日庵寺駅側の出口にある金物屋のひとり娘、万屋（よろずや）みなみの顔を頭に思い起こしながら。

けれども、表に立って呼び込みをしている自分の姿を想像してみると、それだけでなんだかほっぺたが熱くなってきてしまうのを禁じ得ない。

みなみちゃんのように、男の子みたいに元気でちゃきち

やきな雰囲気だと呼び込みもさまになるけれど、自分なんてきっとあわあわして口ごもってお客さんも及び腰になってしまうだろう。

想像だけで緊張してしまっているうちに、いつのまにか硝子戸（がらす）の向こうの人足は途絶えていた。

すこしばかり茜の色を帯びてきた風景の中、斜め向かいの居酒屋さん『三谷屋（みたに）』の赤い提灯に、いまちょうど灯りがともったところだ。

もうじきしたら、お母さんも戻ってくるだろう。

レジの影の柱にさがっている小さな鏡を、初穂は覗（のぞ）きこ

んだ。寝こけていたのでよだれの跡とかがないかが心配になったのだが、幸い顔はいつもの通りだった。

いつもの通り。

たまにひとりで街に出てバスで料金を払おうとすると、運転手さんが「小学生は半額でいいんだよ」と親切に料金投入口をおさえてくれてしまったりする、一之江（いちのえ） 初穂（はつほ）・十三歳の肖像。

片手でほっぺたをおさえながら、初穂はむつかしい顔でため息をつく。

たしかに、小学生に見られるのも無理はないことなのだ。

今日は中学校から帰ってそのままお店番なので学校のセーラー服を着ているけれど、それでさえどこか、着こなしているというよりも衣装負けしている雰囲気が強い。

きょとんとした目の大きさと、濃いめなのにきりりとはしていない下がり気味の眉毛が印象に残ってしまう顔。背格好もちんちくりんだし身体のいたるところがぺったんこなままなので、自分が小学校のときに憧れた中学生のお姉さんに近づいている要素はひとつもない。

成長期、という希望の時期に差し掛かっているはずなのに、自分のこの惨状はいったい何なのだろう。

ふぅー……と、ため息をつきながら、空気が抜けるようにしょんぼりとうつむきかけた――その初穂の耳に、こんこん、と戸を叩く音が聞こえた。

――あ、お母さん――

おつかいから母が帰ってきたのだと、お店入口のほうにまなざしを向けて……そのまま初穂の目は、驚きの形に見開かれた。

店の外に立っていたのは、お母さんではなく――

けれども、知っている顔だった。

さきほど一緒に学校から帰ってきたのだけれど、向こう

はもう着替えたのだろう。すらりとした長身に、黒いタートルネックのセーターと細身のズボンをまとっている。

すこししっとりとした感じの肩までの癖っ毛と、細面（ほそおもて）の顔。

浮かんでいるのは、凛（りん）とした、それでいてどこか眠たげな、二重瞼（ふたえまぶた）の目を細めた表情。

「――か、薫（かおる）ちゃんっ！」

初穂があげた声に、向こうは答えない。答えないけれど、ごくごくかすかにうなずいたのは分かる。

薫ちゃん――春日（かすが）横丁は十河理髪店（そごうりはつてん）の娘・十河（そごう）薫（かおる）は、も

とより表情と言葉の動きが必要最小限なのだ。
初穂は慌てて入り口に駆け寄った。駆け寄りながら、ほっぺたがまた熱を帯びていくのがわかる。
「ごめん気がつかなくって！　どしたの薫ちゃん、いつからいたの？」
引き戸をあけながら、初穂はあわあわした声で問いかける。
数秒の沈黙を挟んで、薫は澄んだアルトボイスで口を開いた。
「さっきから」

「――え？　えと――」
「初穂が、ひとりで、ずっと鏡を見ているところから」
薫の声には、いぶかしがったりからかったりする調子はみじんもなく、あくまでも冷静で平坦で。
それゆえに、初穂の頬には瞬間湯わかし器のように熱がのぼった。
やはり見られていたのだ。あわわわ。
「ち、ちがうの！」
何が違うんだかわからないまま、初穂は胸の前に両の手のひらを振った。

「ちょっと寝ちゃってたから、目やにとか寝癖とか突いてないかなって思っただけでっ」
正直に特に要らないことを口走ってしまい、ますます頬の火照(ほて)りは温度をあげる。
「そう」
ごくごく冷静な声とともに、薫は頷いた。
「大丈夫。言わなければ、寝起きだとはわからない」
二重の瞼(まぶた)を半分おろした、こちらのほうがすこし眠たげなまなざしが初穂の顔に向けられた。
「そ、そう――ありがと薫ちゃんっ」

女の子にしては長身な薫のほうが頭半分以上背が高いので、初穂からは見あげるかたちになる。

「ところで、その、どしたのきゅうに」

まだあわあわと口ごもってしまいつつ、初穂はたずねた。

薫は――言葉では応えず、開いた硝子戸（がらす）の間から、こちらに一歩を踏み出した。

ぶつかりそうになって、ふわぁ!?　と声をあげながら飛び退（の）く初穂。初穂が今まで立っていた店内のその位置に、入ってきた薫が立つ形になる。

「今、ひとり？」

「えっ？　あ、う、うんっ」
「そう」
おっかなびっくり首を縦に振った初穂とは対照的に、薫は静かに頷くと、こちらを向いたまま後ろ手に引き戸を閉めた。
「……薫ちゃん？」
つばを飲み込んで、初穂は幾度かまたたきをする。
なにかこう、薫ちゃんの様子は妙というか――もしも見知った薫ちゃんではなかったら、押し込み強盗さんかなにかと思って悲鳴をあげねばならない怪しさなのである。

遠くまた、レールを走る電車の音が聞こえてきた。踏切は鳴らないから今度はきっと、高架の上の都古原(みやこはら)線のほうだろう。

緩慢なそのリズムを背景にした、へんてこに張りつめた沈黙を置くこと数秒。

「お茶を飲みにきた」

「――へ？」

唐突な薫の言葉に、初穂はまたすっとんきょうな声をあげる。

「味見」

薫は言いながら、店の片隅――窓際の一角に置かれたちいさなテーブルと椅子にまなざしを向けた。
「あ！　そうなんだ……！」
ようやく得心がいって、初穂は頷く。
初穂のお店では、店頭に置いてある量り売りの茶葉の試飲サービスを行っている。
買ってくださったお客さんには一杯無料。味見に試飲だけしたい場合は１００円だ。
「でも、いまお母さん留守だから、お茶、わたしが淹(い)れるのになっちゃうよ？」

「知ってる」
「え？」
「だから、来た」
「え？　え？」
初穂のあげたすっとんきょうな声に、薫はいつものすこし眠たそうな表情のまま眉を八の字にした。
唇もつぐんで考え込むように宙を見あげること数秒。
「別に、初穂のおばさんのお茶が飲みたくない、というわけではない」
「え、あ、う、うん」

付け加えられたその言葉に、初穂は戸惑(とまど)ったままこくこくと頷いた。
どうもこう、薫ちゃんはときどき、発言が何を意図しているのかがいまいちよくわからないときがあるのである。
「ごめんね、お母さんのより味は落ちちゃうけど――座って待っててよ」
照れ笑いを浮かべつつ、窓際テーブルの椅子を引く。
薫ちゃんは、こちらの顔をしばらく見つめて……唇をちいさなへの字に結んで息をつくと、椅子に腰を落とした。
――あれ？

初穂はきょとんとどんぐりまなこを見開く。
なにか今、ちょっと薫ちゃんがしょんぼりしたような感じがしたのだけれど、気のせいだろうか。
なにか悪いことを言ってしまったかと思い返すものの、心当たるところもなく。
首をかしげたまま、ともあれ初穂はレジ奥の台所スペースに戻ってやかんに水を入れる。
お茶用のお湯をつくるお店の湯沸しは、小さいけれどずっしりとした鉄瓶(てつびん)だ。水を入れると特に、つるをしっかり握らないと不安になるくらいの重みがある。

そのぶん、コンロのうえに置くと揺るぎなく安定して、なんだか頼もしいのだけれど。

「あ！　そうだ、薫ちゃん、お茶、どのお茶にする？」

火をかけたとたんに、肝心なことを聞いていなかったのに気がついた。

初穂たちのこのお店では、量り売りをしているお茶はどれでもお試し飲みができる。新茶の時期からは遠いのだけれど、煎茶も抹茶もほうじ茶も種類豊富――ちいさなお店だけれどお母さんががんばって品ぞろえをよくしているのが、初穂にとっても自慢なのだ。

棚の前に歩み寄ると、初穂は縦横に並んだ茶箱を背に薫を見た。ちょっと胸をはって、「さあ、どれでもどうぞ！」の構えである。

薫ちゃんは、普段から眠たげな半眼気味になっている二重瞼（ふたえまぶた）のまなざしをさらに細めて、唇を結んだまましばしこちらを見る。

薫ちゃんの座る席の向こう、今度は左から右へと人が流れていく。路地を染める茜の色が濃くなるとともに、駅から駅へと歩む人足もだんだんと増しつつあった。

その人の流れのいちばん大きな波が過ぎゆくまでの間、

薫は無表情のままわずかに首をかしげて考え――思い切ったように、再び初穂の顔を見る。

「初穂の、お勧めのお茶がいい」

「えっ」

今度は初穂のほうが、きゃろきょろと自分の後ろの茶箱の群を見回す番だった。

――お、お勧めかあ……

あらためてそういわれると、選ぶのに迷ってしまう。もちろん、どれもお勧めだからこそではあるのだけれど。

「――それと」

短い声が、初穂の考えを遮った。
いつもの薫の声より大きい、感情の波のこもった一声。
思わず目を向けると、椅子に座ったまま薫ちゃんはこちらにげんこつを突きだしていた。
――え……？
なんだろう、と一瞬思ったのだけれど、薫ちゃんのまなざしはどうも、『こっちへ来て』という信号を発しているように思えて。
言葉と表情の動きが少ない薫ともう十年以上にわたって友人をしているので、わずかな眉と視線の動きで意図を読

みとれることも少なくはない初穂だ。
薫ちゃんの前に戻って、つきだされたげんこつの下になんとはなく手のひらを差し出すと――
ちゃりん、と音をたてて、薫の指から銀色の硬貨が初穂の手のひらに落ちた。
「代金」
「へ？　え、だって、これ――」
「さっき、お店の洗い物の手伝いをしてお駄賃（だちん）にもらってきた」
「わわわ、いやその、そうじゃなくって！

お茶、試し飲みは１００円だよっ？　払い過ぎだってば」
手のひらの上に並んだ、銀色をした百円玉が二枚。おつりというか余分な支払分の一枚をつまんで、薫ちゃんに返そうとする。
「いい。おつりは、要らない」
表情を変えずに、薫ちゃんは静かに首を横に振った。

挿絵①

「もう１００円は、初穂のぶん」
「えっ……？」
「私がおごるから、ふたりぶん、お茶を淹(い)れてほしい」
「えー!?」
初穂は、どんぐりまなこをぱちくりさせてしまう。
「だ、だめだよそんなの、わたしお店のひとなのにお客さんにおごってもらっちゃうとかしたら――わたしのほうこそ、一杯くらい薫ちゃんにごちそうするってば！」
「大丈夫」
薫ちゃんの声はゆるぎない。

「うちのお客さんもよく、飲み屋さんでお店の女の人にお酒をおごったとか話してる。問題ない」
いやいやいやいや。それはなにかこれとは違うというか、むしろそれもそれで問題というか。
とはいえどう反論していいのかわからず、あわあわと口ごもっているうちに、
「初穂とお茶を飲もうと思って家の手伝いをしてきた。私が代金を払って飲むのでなくては意味がない」
薫の発したその言葉で、初穂の抵抗は一気に封じられてしまった。

「え、えっと、その――じゃあ、ありがとっ……」
頭をさげながらぎゅっと握った二枚の百円玉は、かすかに温かかった。たぶん薫ちゃんは家を出てから――もしかしたらお駄賃にもらってからずっと、うちでお茶を飲もうと思ってこのお金を握りしめてきてくれたのだ。
初穂は再びお茶の棚の前に戻る。
中学生になってからはときどき短時間のお店番をすることはある初穂だが、『お勧め』なんてものを選ぶのは、考えてみれば初めてで。
初めてといえば、お母さんがいるときに薫ちゃんが来て

ふたりでお茶を飲むことはあっても、こんなふうに自分が薫ちゃんにお茶を淹(い)れたことなんて、これまでの記憶にはなくって。お客さんにお茶を淹(い)れるのも、そもそもこれが最初で。

――わ、わわ、なんか、どきどきしてきた……

制服の胸に、初穂は手のひらをあてた。ぺたんこな膨らみの奥で心音が少しペースを早めているのがわかる気がしてしまう。

けれども、ちゃんとしなきゃなのだ。

手の中にある、二枚の百円玉。薫ちゃんがわたしのお勧

めを淹(い)れてほしいと言ってくれた、その信頼にこたえるためにも。

並んだ木製の箱を見回し――人差し指を伸ばして方位磁石のようにめぐらせた初穂の腕は、中断にある木箱をさしてぴたりと止まった。

この間お母さんが仕入れた、秋限定の茶葉。

秋はいわゆる、八十八夜の一番茶の時期ではないのだけれど――茶摘みから数ヶ月注意深く寝かせてから秋にあらためて火入をした、春の新茶とはまた違った新鮮な香りのするお茶なのだ。

この間お母さんが淹(い)れたものを飲んで、香りの柔らかさにびっくりしたばかりで。

――うん。

ひとつうなずくと、初穂は棚に手を伸ばして、茶箱を手近な卓の上におろす。

慎重にふたを開くと、かすかに甘みを帯びた茶葉の香りが吸い込んだ息に混じった。

茶箱は表から見ると塗りものもない古びた木の箱なのだけれど、中は茶葉がしけらないようにトタンが貼られ、ふたも隙間なくすとんとはまるように寸がとられている。

保存や運搬に使われるほんとうの茶箱はもっと大きいものなのだけれど、初穂のお店のこの茶箱はおばあちゃんの代に、棚置き用に特別に作ってもらったものなのだという。

茶箱の中の葉をすこし返して混ぜてから、小さめの急須を持ってくると、おさじひとすくいの茶葉をこぼさないように茶こしに入れた。

ちらりと横を見ると、窓際のテーブルの薫ちゃんがじっとこちらを見つめているのがわかった。座ったまま、ズボンの両膝に両手をおいて、身じろぎすらもせぬままに。

うわわわ、と緊張がまた高まって、ほっぺたがすこし火照(ほて)

ってきてしまう。
初穂のその熱がのりうつりでもしたかのように、奥のコンロの上の鉄瓶がほのかに湯気を吹きはじめた。
さあ、いよいよだ――と鼻息を吸い込んで、しかし。
「あ」
そこで初穂はあらためて、自分のいでたちを見おろす。
お母さんがすぐ帰ってくると思っていたし、その間お客さんがいらしてもお茶を買っていただく以外のことはないだろうとも考えていたので、中学校から帰ってきて制服も着替えていないままだ。

「ちょっと待ってて、薫ちゃんっ」
コンロの火を弱めながら、いそいそとレジ奥の戸口をくぐる。
すぐのところの壁に掛けてあるお店用の前掛け、もとい エプロンをつかんで、初穂は身につけた。身のこなしがどうにもぶきっちょなので、急いでいるつもりでもどちらかというと『もたもたの早回し』みたいな動きになってしまうのがもどかしいところである。
なんとか腰の後ろの紐を結び終えたところで、鉄瓶がせかすようにひゅるぅぅ、と沸騰の音をあげた。

「あわわわ、」
ふきこぼれる前に火を止め、息をついてから顔をあげて。
そこでようやく初穂は気付く。
薫ちゃんがこちらを見ているのは、さっきまでと変わらないのだけれど――すこし瞼(まぶた)をおろしたいつものけだるげな目ではなく、どこかきょとんとした、あっけにとられたみたいな表情で。
「あっ……やっぱり、ちょっとへんかな、このかっこう」
その原因に思い至って、初穂はちょっと照れくさげに胸元にてのひらをあてる。

お茶を淹(い)れるにあたって少しでも店員らしいでたちをと思ったのだけれど、学校の制服のうえにエプロンだけというのはやっぱりとってつけたようでへんてこかもしれない。

「ううん」

けれども薫ちゃんは、ぼんやりと首を横に振る。

「すごくいいと思う」

初穂の格好を見渡すようにゆっくりうなずいてから、すごくいい、と、薫はちいさな声でもう一度繰り返した。

「へ？　えええ？　そうかな、」

手放しに誉められたのでなんだかかえって恥ずかしくなり、ほっぺたに熱をのぼらせつつ初穂はどんぐりまなこをしばたかせる。

うわわ、だめだだめだその、照れてる場合じゃなくて、お茶、そう、ちゃんとお茶淹れなくっちゃ……！

目の前の鉄瓶にまなざしを戻し、ひとつ息を吸って背筋をただす。

お茶を淹れるお湯の適温は八十度。もちろんそのあたりはある程度曖昧で、沸騰させてからいちどお茶碗に入れて、そこから急須に注げばだいたいちょうどいい頃合いになる。

とはいえ今日は、なんだかぴったり八十度を測るために温度計が欲しくなってしまう初穂なのだった。

代金をいただいて、ひとりで、はじめて淹(い)れるお茶。

薫ちゃんが握りしめてきてくれた、２００円。

このまま鉄瓶(てつびん)を持つと重さと緊張で手が震えてしまいそうで、初穂はたちのぼる細い湯気を見つめて再び深呼吸をする。

「初穂」

短い声が耳に届き、初穂はびくっとして顔をあげた。

お店の外の路地はいよいよ夕焼けを濃くして、ガラスの

前の椅子に座した薫の姿は茜色の中に浮かびあがっている。
「大丈夫？」
片方の眉をすこしだけ斜めにして、薫はたずねた。
「えっ……!?」
「背中と手足が変な風にまっすぐになっている」
「あ――はは、へいきだよぜんぜんっ」
初穂はあわてて、ほぐすように肩をまわしてみせた。薫ちゃんは意外とこういうところに鋭くてよく見ていて――やっぱり見破られていたのだ。
「ごめんね、なんか、へんてこに緊張しちゃってっ」

言い当てられたことであっさり口にすることができて、口にできたことでちょっとだけ緊張が解けた。

「ありがと、薫ちゃん」

「……いや、私は別に、何も」

静かな声で言って、薫ちゃんはまなざしをそらす。表情は変わらぬまま、ほんの少しだけわかるくらいに唇をとがらせて。

わずかとはいえ薫ちゃんにしては珍しい表情の変化に可笑(おか)しくなってしまいながら、初穂は鉄瓶(てつびん)のつるをとった。指と手は、もう震えてはいない。

並べたふたつのお茶碗にお湯を注いで、熱が移るのを少し待ってから、手にしたお茶碗を急須に傾ける。

ふたをとった急須の中にのぞく、深い緑。きらきらしたお湯の流れがその茶葉の上に巡り、ひとすじの細い湯気を立ちのぼらせた。

ひと回しお湯を落として、次のお茶碗を携(たずさ)えつつ急須(きゅうす)の中をのぞき込む……お茶を淹(い)れる手順の中で、初穂が好きな瞬間だ。

急須の中で、お湯に濡れたお茶の葉が柔らかに動き出す。膨らむようにも見え、しんなりと崩れていくようにも見

え。

ほどける――という言葉がこの時間には似つかわしいように、初穂にはいつも思える。

贈りものの包みの結び目がひとりでにほどけて、開いていくみたいに。ひとすくいのお茶の葉の中にあるたくさんの結び目がほどけて、ずっと中に篭(こ)められていたものがふんわりこぼれだしてくる。

だからなんだか、立ちのぼる湯気の匂(にお)いを吸い込むと、自分の中でも結び目のリボンがほどけてくるような気持ちになるのだ。

ふたつの茶碗からお湯を注ぎ終えて、急須のふたを閉める。

お店の中に降りた静寂（しじま）のとばりに、遠くまた、踏切の音が聞こえてきた。

◆

「おまたせしちゃってごめんね！　もっとてきぱきしないとだめだよねえ」

照れくささに思わずはにかんでしまいつつ、初穂（はつほ）はお盆

の茶托を卓の上に移す。
木製のこの茶托も、お茶を淹れ終わって茶碗をお盆に乗せる段になって、あわてて用意した次第である。ほんとうだったらぜんぶ用意してからはじめるのが、ばたばたしないでいいのだけれど。
「いや、全然」
茶托にのせたお茶碗の、その若葉色の水面にまなざしを落としつつ、薫ちゃんは静かな声で応えた。
「お茶を淹れる初穂を見ていたから、長いとは感じなかった」

「ふえぇっ？　そ、そう？　それなら、いいんだけど……」
しどろもどろに言いながら、初穂は丸いお盆をハンドルみたいに胸の前に回してしまう。
たぶん薫ちゃんは励ましてくれているのだけれど、なんだかこう、こっ恥ずかしさが先に立ってしまう初穂だ。
薫ちゃんはときどき、ともすると照れてしまいそうなことをすましたまま口にするので、不意をつかれるとあわあわする。
ちいさな卓の向かいの席に、初穂はおっかなびっくりに腰を落とした。

自分の目の前のお湯のみと、薫ちゃんのお湯のみのお茶の面(おもて)を見つめてから、上目づかいに薫ちゃんの顔をみる。

ちょうど薫ちゃんはこちらの顔を見ていたところで、目があってしまい初穂はあわててうつむいた。

エプロンの膝に両手をおいて、座ったままのきをつけみたいな姿勢になる。

「う、うまく淹(い)れられたかわからないけど」

おずおずとした口調と上目遣(うわめづか)いとともに、初穂は手のひらで薫の前のお湯のみを指し示した。

そういえばエプロンは脱いで畳むべきだったかもだけど、

まあ仕方がない。
いつの間にか電車が停まったようで、硝子(がらす)の向こうの路地をひとが通り過ぎていく。
窓際のお試し飲み用のテーブルが埋まっているのは珍しいからか、硝子(がらす)越しにちらりと見ていくひともいて、恥ずかしさが増幅されてしまう。
「――いただきます」
うなずいて、薫ちゃんはお茶碗を手の中におさめた。
こくりと礼を返しつつ、初穂は唇をつぐむ。
薫ちゃんの指は、白くてすらりと長い。その指が、手が

口元にお湯のみを運ぶ仕草は静かで――そう、常にぶきっちょさが動きにあらわれる自分と違って、薫ちゃんはちいさな頃から動作がスマートで無駄がない子なのだ。

薄い桜色の唇がお茶碗の縁に触れるところまでを見たところで、初穂はふと気付いて再びうつむく。いくらなんでも、緊張したままじっと注目し続けるのは失礼というものだろう。

まだ置いたままの自分のお茶碗。若草色の水面（みなも）に映る天井灯の電球が、かすかに震えて揺れている。

「――ん」

短くて長い数秒間の静寂を、薫ちゃんの微(かす)かな声が破った。

「美味(おい)しい」

その一言に、初穂は頭の後ろで三つ編みのしっぽが跳ねるくらいの勢いで顔をあげた。

「ほ、ほんとっ？」

思わず身を乗りだして発した声に、薫は「ん」ともう一度うなずいて、ふた口目をゆっくりと飲みこんだ。

「すこし、ふわっと甘くて、ほっとする味がする」

二重瞼(ふたえまぶた)をほんのすこしおろした、ちょっとだけ眠たげで、

けれども涼しげな薫の面立ち。その口元が、面と向かっていてようやく判るくらいにだけれど、微笑みのかたちにほころぶのを初穂は見た。

「ほんとに？　うわー、よかったっ……」

気持ちが舞いあがるあまり、声のトーンがあがって言葉も重なってしまう。

薫ちゃんの感想はひとことだけれど、初穂が自分が淹れたお茶に言われて嬉しいことがぜんぶ詰め込まれていて。

良いお茶をうまく淹(い)れられたときというのは、お茶の味のいちばん底の部分に柔らかな甘みがよぎるのだ。

自分のお茶碗を手のひらにくるんで、そうっとひとくち飲んでみる。

――あ――

薫ちゃんの言ってくれたことを聞いた後だからかもしれないけれど、飲み下したあと、喉の奥にかすかな甘みが残った気がする。

もちろん茶葉がよかったおかげであるし、その茶葉の風味をきちんと引き出せたかはわからない。でも、おそらく自分がいまできるなかでは、最良に近い一杯だ。

ふうぅ……と、息をこぼす唇がへんてこなかたちに弛ん

でしまう。
「初穂？」
思わず背もたれに身体を沈めると、薫ちゃんが片眉をひそめてのぞき込んできた。
「お茶を淹(い)れるのは、そこまで体力を使うものなのか……」
「あ！　いやいや、そんなべつにぜんぜんっ！」
どんぐりまなこをまんまるにして、初穂はわたわたと両の手のひらを振る。
「今日はちょっと――はじめてだったから！」
「はじめて？」

「うんっ。代金いただいて、自分でお試しのお茶淹(い)れるのってこれまでしたことなくって……」

えへへ、と肩をちぢこまらせて初穂ははにかんだ。

ちょっと大げさすぎるかもしれないけれど、一気に気持ちがゆるんだ拍子(ひょうし)に目頭がじんわり熱くなってしまう。

「途中でそう思ったら、急に緊張しちゃって。あのまま薫ちゃんが声をかけてくれなかったら、手ががたがた震えてお茶碗とか割っちゃってたかもだよ。

ほんと、ありがと！」

「さ――さっきも言った。私は別に、何も」

ちいさく咳払いをして、薫ちゃんはお湯のみを口元に運んだ。

自分を気遣ってくれた、その薫ちゃんがほっとすると言ってくれたお茶が淹れられたことが――自分のお茶が薫ちゃんの何かしらの結び目をほどくことができたかもしれないことが、初穂にとってはなによりほっとすることで。

「……はじめての相手が薫ちゃんで、よかったよ」

エプロンの胸をおさえて、口にしたその言葉に、

んくっぅ！　というか細い悲鳴が重なった。

「へ？　あ、わ、だいじょうぶ薫ちゃんっ!?」

あわてて顔をあげた初穂が見たものは、片手で口元をおさえてむせ返る薫の真っ赤になった顔だった。
「お水持ってくるから！　ごめん、もしかしてお茶の中にお茶っ葉のかけらとか入っちゃってた⁉」
「ん、んんん」
立ち上がろうとした初穂の肩を片手でおさえて、薫は首を横に振る。細い喉が、こくんっとお茶を飲み下す音がした。
「平気。なんでもない」
「え……でも、だって、――顔、すごく真っ赤だよ？」

よほど息が詰まってしまったのか、色白な薫ちゃんの頬は熱でもあるみたいに赤く染まっていて。

「なんでもない」

初穂の服をつかむ手にぎゅっと力を込めて、薫は繰り返した。

「顔が赤いのは、その――初穂が急にあんなこと言うから――」

「え？」

言葉の後半がちいさな声で聞き取れなかったので、初穂はきょとんとして首を傾げる。

「な、なんでもない――」
同じ言葉を、薫ちゃんは三度繰り返した。
「もう平気。気にしなくていい」
目をつむって、ちいさくひとつ咳払(せきばら)い。
とはいえ薫ちゃんのほっぺたは、さらに一段と赤みを帯びているように思えるのだけれど。
薫ちゃんはうつむいたまま、唇を結んだ。
ズボンの膝に両手を置いて、ちらりと一瞬上目遣いにこちらを見る。
「私も、」

言い掛けてまた口をつぐみ、お茶碗に残ったお茶の水面（みなも）にまなざしを落とす。

今日の薫ちゃんは、なんだかいつもとちょっとちがうと初穂は思う。

なにかこう、普段の薫ちゃんよりも、こちらから見える気持ちの針の振れ幅が大きいというか。

それでいて、どうして薫ちゃんがそんなふうなのかはとんとわからないままなのだけれども。

お茶碗を両手で持ちあげ、ちょっと茶道の一服っぽい動作で飲み干したあとで、薫ちゃんはひとつ息を吐いて、吸

った。
「私も、その――初穂のいちばん最初になれて、よかったと思う」
まなざしをテーブルの上に落としたまま、紡(つむ)がれるひとこと。いつもの通りの静かな声は、けれどもどこか、いつもよりも少し高めの熱を帯びて聞こえて。
とんっ、と、胸の奥で心臓がすこし大きく跳ねた。
「ごちそうさま。ほんとうに、美味(おい)しかった」
薫ちゃんの顔に、ほんのかすかな笑みが浮かぶ。
淡い桜色の唇の端をごくごくちょっとだけ綻ばせた、涼

やかな笑み。
それでも、いつもの薫ちゃんのなかではそれがとても大きなシグナルなのだということは、初穂にもよくわかっていた。
「おそまつさまでした。もっと精進するから、また飲みにきてよ」
あわあわしそうになる自分に芯を通すように、背筋を伸ばして初穂は笑みを返す。
ん、ああ、と頷く薫の頬には、まだ淡く火照りの色が浮いていて。まなざしは少し落ちかなげに、こちらとテーブ

ルの上を幾度か往復していて。
やっぱりこう、今日の薫ちゃんはちょこっとなんだかへんてこで。
けれども、薫ちゃんのへんてこなところを見られたことはなんだか嬉しいことな気がして――初穂は照れ気味なはにかみを浮かべたまま、自分のお湯のみのお茶を飲み干す。
窓の外からはまた、遠く踏切の音が聞こえてくる。

◆

「うわー、日が落ちたらきゅうにひやっとしてきちゃったねえ」

お店を出たすぐ前の路地。制服の二の腕をさすりながら、初穂は空を見あげた。

両側に並ぶ建物の影に細長く切り取られた夕空は、茜色からすでに藍の色に変わりつつある。お昼のうちや建物の中はともかく、十月半ばの日暮れ、外の空気は布地越しにひんやりと染みこんでくる涼しさだ。

「ごめんね、長居させちゃって。風邪とかひいちゃだめだよ」

「それはすこし大げさなのではないかと思う」
見あげた初穂に、薫は静かな声で応えた。
まあ、たしかにそれはそうなのだ。
こちらを向いた薫ちゃんの肩の向こう、二十メートルもいかないところに、青と赤の線が描かれた筒形の看板がくるくると回っているのが見える。
薫の家――十河（そごう）理髪店は、初穂たちのお店からあいだ二軒しか離れていない同じ横丁のご近所さん。身体が冷えるより前に、一分とかからず帰りつける距離だ。
むしろ、こんなところで引きとめていたことで風邪をひ

かせてしまう可能性のほうが高いわけで。
「ほんと、きょうはありがと。また明日の朝ね」
「あ……ああ」
切り出した挨拶に、薫がうなずく。
――？
すこしばかり歯切れの悪いその返事の声に、初穂はきょとんと目を見開いた。
薫は踵（きびす）を返すでもなく、ふたりの足元のちょうど中間あたりにうつむき加減の視線をさまよわせている。
「どしたの？　薫ちゃん」

「いや――」

息を吸って、言いかけて。けれども薫ちゃん唇をちいさなへの字につぐむ。

ふたりの間に降りた沈黙に、すこし遠く、通りのざわめきが聞こえてくる。

横丁の角の向こうは、日庵寺（にちあんじ）駅の高架をくぐる駅前商店街。のんびりとした町だけれど、夕暮れの買い物の人足と家路に向かう電車乗り換えの人足が重なるこの時間は、ひとときの賑わいをみせるのだ。

横丁の細い路地にもまばらな足音は響き、店の前に向き

合った初穂たちの横をひとが通り過ぎていく。
「――薫ちゃん？」
眉をハの字にして、初穂は薫の顔をのぞきあげた。
さっきからの薫ちゃんのちょっとへんてこな調子は、やっぱり完全には元に戻っていなくって。店内からの明かりと外灯に照らされた凛々（りり）しい顔は、まだほんのすこし赤みがさしている。
――もしかして薫ちゃん、もう風邪ひいてて熱があったりするんじゃ……
さすがに心配になってきて、けれどもどう切り出してい

いのかわからずに薫の目を見あげた――そのときだ。
「あれれ？　そこにいるのは初穂さんたちではないですか」
灯りのともりはじめた路地に、のんびりとした声が響いたのは。
「えっ？」
初穂はすっとんきょうな声をあげ、薫もわずかに目を見開いて回れ右をする。
横に退いた薫の、ちょうど真後ろ。初穂から正面数メートルの先に、佇むのはちいさな人影。
「あ、やっぱり初穂さんと薫さんです。ちょっと早い時間

ですけどこんばんはー」
ベージュ色のセーターの両肩をもちあげて、彼女ははにかんだ。
ほんとうは手を挙げたかったのかもしれないけれど、こんな格好になったのは両手で買い物かごを提げているからか。
「桃子(ももこ)ちゃんっ。こんばんは！　お買いものの帰り？」
「ええ。今日はこの秋はじめてのお鍋なのですよう」
端から長葱(ながねぎ)がのぞいた買い物かごを胸のあたりまで持ちあげて、桃子ちゃんは片目を細めてみせた。それからちょ

っと横を向いて「ただいまー」と会釈をする。
桃子ちゃん――百川（ももかわ）桃子（ももこ）の家は、ちょうどいま彼女が立っている道の脇。初穂のお店からはふたつお隣になる、百川生花店（ももかわせいかてん）なのだ。お店の中から路地を照らす灯りに、店頭籠（かご）売りの秋桜（コスモス）とマリーゴールドの切り花が柔らかな色彩を湛（たた）えている。
桃子ちゃんは買い物かごはさげたまま、こちらに歩いてきた。
「まるせ屋さんで、鶏肉大安売りでした。柚子（ゆず）ぽんもあるので、水炊きにしようか寄せ鍋にしようか迷うところです」

こちらを見あげる顔に浮かぶ、ふんわりと幸せそうな笑み。

桃子ちゃんは同い年で同じ中学校一年生なのだけれど、ほんとうにちっちゃくてあどけない。

肩のあたりで切りそろえた、おかっぱをすこし柔らかにした感じの髪型。くりっとしたまなざし。

初穂も小学生に間違えられはするのだけれど、おそらくそれは五年生相当くらいで、対して桃子ちゃんは普通にしていると三年生くらいに見える気がする。

それでいてこう、穏やかな言葉遣いとおっとりした雰囲

気もあって、喋るとお姉さんな――ときとしてお母さんっぽくすら感じる女の子なのだ。

「――お鍋かあ。いいなあ、そろそろあったかいものが美味(おい)しい時期だよね」

「ですです――あ、初穂さんのおうちも、今日はお鍋ですよ？」

「へ？」

自分も知らない我が家の情報を唐突に告げられて、初穂はきょとんと目を見開く。

へへー、とちょっといたずらっぽくはにかむと、桃子は

言葉を続けた。
「実はさっき、まるせ屋さんでお母さんにお会いしたのです。八百菊（やおぎく）さんで白菜（はくさい）と長葱（ながねぎ）も買ったので今日は土鍋を出さなくちゃねっておっしゃってました」
「あれ？　そうなんだ……　買いものしてたの？」
たしか、商店会の用事で出かけてくると言っていたはずなのだけれど。帰りが遅いのは、ついでに買いものもしているからなのだろうか。
「そうそう、初穂さんに伝言をうけたまわってきたのですよ。

うっかり先にお買いものをしてしまって、これから今川焼をごちそうになって話し合いをしてくるから、お帰りは六時くらいになるそうです。ご飯だけ炊いておいてくださいとのことでした」

「えーーー！」

宵(よい)の口も近い横丁の細道に、叫びに近い初穂の声が響きわたった。

「な、なにそれなにそれ！」

いや、もともとわが母・一之江(いちのえ)若葉(わかば)はそういうひとではあるのだけれど。

その間、自分がはじめての代金をもらってのお茶淹(い)れに緊張しまくっていたというのに、『今川焼き食べてくる』はないと思う。というか今川焼き云々の部分は桃子ちゃんに託(たく)して伝言にわざわざ挿(い)れる文面じゃないというか。

もうっ！　とぷんすかいからせた肩に、隣からそっと手のひらが置かれた。

「――薫ちゃん？」

「そのおかげで初穂のはじめてのお茶が飲めたのだから、私は構わないと思う」

「ええええー、でも、お母さん戻ってきてたらちゃんともっ

と美味しいお茶淹れられたかもなのに……」
「知っていてきたってさっきも言った。構わない」
静かだけれどちょっと強い声で言って、薫は初穂から桃子のほうにまなざしをそらした。
桃子ちゃんはにこにこしたまま、こちらふたりの顔をかわるがわるに見あげている。
「ああ――そういえば、薫さんは初穂さんにお伝えする日だったのですね」
「――へ？」
その微笑のまま桃子が発した一言に、初穂は今日幾度め

かになるぽかんとした声をあげた。
お伝えする？　薫ちゃんが、わたしに――
さっきからの記憶をたどったけれど、何かを伝えられたようなことは特にないように思えて。
隣の薫ちゃんはこころもち瞼（まぶた）をあげて、はりつめた表情で口をつぐんでいる。
「日にちなどはもう、相談されたのですか？」
「い、――いや、まだ、」
ようやく発した薫の声は、いまにも消え入りそうな案配（あんばい）だ。

「……え？」
桃子ちゃんは首を傾げ、ちょっときょとんとした表情になる。
「もしかして、そもそもまだお伝えする前だったのでしょうか？」
「ん」
短い声とともに、薫が首を縦に振る。
「まあ、それはたいへんです！」
ぴょん、と、桃子は一歩後ろに飛び退いた。
肩までの髪と提げた買い物かごの葱（ねぎ）と――それからちい

さな身体に対してふっくらとしたセーターの胸が、ふわりと上下に揺れる。
「ということは、こんなところに割り込んできた私はとんだお邪魔だったのではないですか」
「あ、いや、そんなことは――」
戸惑(とまど)いがちな声とともに薫ちゃんが手を伸ばすけれど、桃子ちゃんのまなざしはなにやら切迫した感じに見開かれたままだ。
「それでは、退散することにします。初穂さん、よいお鍋を。薫さんはよい結果でありますようです」

どこか神妙な声でそれだけ口にすると、桃子ちゃんは買い物かごを両手で提げてこちらを向いたまま、とことことことこっ！　ととんでもない早さで最初に見かけた位置まで後退した。

路地を通りがかったひとたちが、ちょっと驚いた様子でこちらに目を向ける。

初穂ももちろんびっくりしているのだけれど、それ以前に先ほどからずっと会話の流れから取り残されて文字通り目が点になったままであり。

倍速巻き戻しのような動きで桃子ちゃんのちいさな身体

が百川生花店のお店の中に消えてしまってから、初穂はようやく挨拶(あいさつ)すらも返し忘れてしまっていたことに気付く。

あとには離れた商店街のざわめきと、再び響き始めた踏切の音。その夕暮れの柔らかな喧噪の中に、初穂は薫と立ち尽くしたまま。

薫ちゃん家の理髪店の赤と白と青の筒が、路地の先でくるくると回っている。

「えっと、その――な、なんだろ桃子ちゃん急にあんな」

おそるおそる、初穂は薫の顔をのぞきあげる。

桃子ちゃんの様子ことを聞きながら、けれどもたずねた

いのは桃子ちゃんのことではない。
薫は応えない。
二重瞼（ふたえまぶた）を半分おろしているけれど、いつものすこし眠たげにみえる表情ではなく。こころもち不対象に八の字になった眉からは、薫ちゃんの中で何かがはりつめているのが読みとれて。
唇は固くつぐんだまま。薫ちゃんの鼻が長い息を吸い込んで吐く音が、通りのざわめきの中でも妙にはっきりと耳に届く。
「……薫ちゃん？」

自分の心臓の音が早まりはじめるのを感じつつ、初穂は問いを切り出し――

くるりとこちらを振り返った薫ちゃんが、がっしりと初穂の手首を握ったのはその時だった。

「ふぇぇっ!?」

「初穂」

すこしこちらに屈みこんだ薫ちゃんの顔が、正面から、三十センチくらいの距離に急接近する。

「ちょ、ちょっとまって薫ちゃん、ちょっと！」

後ろに身を引こうとしても、胸の前で両手首をぎゅっと

つかまれているのでうまくいかない。
「おち、落ち着こう薫ちゃん、わわわ、」
パニックになりかけながらぶんぶんとかぶりを振ると、その拍子に路地を行くひとがちらちらとこちらを見ていくのが視界に入ってしまう。
「ひとがみてる、ひとがみてるってば……！」
ひそめた叫び声を投げかけたけれど、薫ちゃんの耳には届いてはいないようだ。というか、正面至近距離からこちらの顔を見すえている薫ちゃんのまなざしには、周りの様子なんて見ようとしている気配もなく……！

ほっぺたが急にのぼせあがる。わけもわからないままの不測の事態の連続に、頭が真っ白になってざわめきがすうっと遠のいて――

「ひとつ、聞いてほしい話がある」

静けさの中にぽつりと響くように、薫ちゃんの声は耳に届いた。

「――え――」

「聞いてほしい話がある」

もういちど、同じ言葉を薫の唇が紡(つむ)ぐ。

いつもの薫と同じ、静かな口調で。けれども、いつもの

薫らしからぬかすかな震えを声の奥に宿らせて。
初穂は、薫のまなざしを見あげ返した。
薫ちゃんの「話」というのは、もちろん見当もつかないけれど。
ただ、桃子ちゃんがさっき口にしていたのはそのことで――薫ちゃんがすごく真剣であることはよくわかって。
唇を横一文字に結んで、初穂はひとつ頷いた。
薫ちゃんの唇がほっとしたような息を洩(も)らし、それからまた、長く息を吸い込むのが聞こえる。
人の行き交う、灯りのともり始めた横丁の路地。

駅の高架に滑り込む、電車のレールの音が遠く響いて。
その響きの余韻が消えるまでの数秒を挟んでから、
目の前の友人は、十河 薫は、その言葉を初穂に告げた。

◆

――ぴちゃん――ちゃぷんっ……
連なる二つの水音が、湯気の中に響く。
ひとつめは、自分のお尻が湯面に触れた音。ふたつめは、
自分の身体が湯船の中に沈み込んだ音だ。

思いの外熱くなっていたお湯に一瞬はだかの身体をすくませて、それからゆっくりと、初穂（はつほ）は湯船の内壁によりかかった。

――ふう――

手ぬぐいで髪の毛をまとめた頭を後ろの縁にもたれさせて、初穂は長い息をついた。

格子の入ったすり硝子（がらす）の窓辺に、オレンジ色の電灯がともる天井に、湯気はゆっくりと立ちのぼっていく。

――なんか、へんてこな一日だったなあ……

体育座りのかたちで膝を抱えたまま、初穂はぼんやりと

そう思う。
いま、時刻はもう夜の九時半すぎ。
六時という言伝の時間をさらに遅れて七時近くに戻ってきた母・若葉にぶうぶう文句を言いながらお店の片づけを手伝って、桃子ちゃんの予告通りこの秋はじめてのお鍋になった夕食をたいらげて。時間の流れが、ようやくゆっくりになったこの時間だ。
ふう、ともう一度息をついたはずみに、火照(ほて)った頬のうえをひとしずくの汗がすべりおりていく。
なんだかまだ頭の中がぼんやりして、いつもの自分に戻

ってくれない。
夕方までは、ごくごく何事もない一日だったのだけれど。
お店の留守番を頼まれてから――薫ちゃんが硝子戸(がらす)をノックしたあのときから、押し流されるように数時間が過ぎてしまったようで。
湯面(ゆおもて)から両手を出して、初穂はしげしげと見つめた。
さっき、薫ちゃんにぎゅっと手首をつかまれたときの感触が、まだそこに残っている気がした。
――びっくりしちゃうよねえ。急に、あんな、
前触れもなく、告げられた言葉。

いや、今思うと今日のどこかへんてこな薫ちゃんの様子は、十分に前触れだったのかもしれないけれど。

目を細めると、湯気の中に薫の顔が浮かぶ。

正面二十センチの至近距離で目にした、幼馴染の少女の表情。

いつもは少し眠たげに見える薫ちゃんの、あんな真剣な相好（そうごう）を見たのはもしかしたらこれがはじめてかもしれず。

はじめての。

「……はじめて、かあ」

今日の夕暮れのキーワードのようになったその一言を、

初穂は湯船の中でちいさく声に洩(も)らす。
お風呂場の中に濃くなっていく湯気の中に、ついさっきの記憶がふわふわと再生される。

「――え……？」
立ちつくしたまま、初穂は呆けた声を洩(も)らした。
「えと、いま、なんていったの？　薫(かおる)ちゃん――」
薫ちゃんの手から解放された手首が、すこしだけじんじんする。片手でもう片方の手をおさえつつ、初穂は緊張に赤らんだ顔を目の前の友人に向けた。

「――初穂も、私のはじめての相手になってほしい」
一字一句を静かに積み上げるように、薫がいまいちど口を開く。
「そう言った」
「え、う、うん」
ぜんまいの切れかけたおもちゃのロボットのような動きで、初穂はなんとか頷く。
うん。やっぱり、自分の聞き間違いではなかった。
聞き間違いではないけれど――初穂がたずね返したのは薫の言葉の内容が聞き取れなかったからではなく、むしろ

それがどういう意味なのかがわからなかったからで。
そのわからなさは、もう一度聞いてもやっぱり変わらない。
はじめて。はじめての、相手。
さっき自分が口にした言葉ではある。自分の場合は今日、お金をいただいてお茶を淹(い)れたはじめての相手が薫ちゃんであったわけで。
けれども、薫ちゃんのこれは、いったい、
「えと、」
口ごもったまま、初穂がどんぐりまなこのまなざしにこ

めた問いに、薫が応えたのは次の瞬間だった。
ただしそれは、言葉による返事ではなく。
「ひゃ……!?」
先ほど手首をとられたときのように、初穂は再びうわずった声をあげる。
手が。
薫のてのひらが、ぽん、と自分の頭の上にのっかったからだ。
痛いほどの力ではない。けれども、撫(な)でるとも押さえるともつかむともつかない動きで、細い指先は初穂の髪にわ

さわさと沈んで。
はずみで左右に揺れた三つ編みのしっぽを、回されたもう片方の手がそっとおさえる。
「かっ、薫ちゃんっ、」
抱き寄せられて両手で髪をもてあそばれるというわけのわからない状況に、呼びかける声がうらがえってしまう。
自分の三つ編みの髪がうなじをくすぐって、こそばゆさの波が首から背中を滑り降りた。
もうほんの数秒そのままであったなら、初穂は横丁にあられもない悲鳴を響かせてしまっていたかもしれない。

指の動きをとめ、涙ぐみそうな初穂の顔をのぞき込んで、薫はようやく次の言葉を発した。

「初穂の髪を――私に洗わせてほしい」

「う……ふぇ……？」

呆然（ぼうぜん）と、初穂は声をあげる。今日はもうさっきから十回くらいこんな声を発してしまっている気がするが、それはこう、薫ちゃんや桃子ちゃんが突然なことを言い過ぎるのがいけないのだ。

「髪？　え？　な、なにそれ、お風呂やさんとかで？」

聞きかえした初穂の声に、薫はびくんっ、と肩と表情を

震わせた。
「そ……その、それもいいけど、そうではなく、」
斜めに視線を逸らして、薫は一瞬口ごもってから、
「うちの店で、休みの日に、洗髪の練習をしていいと――
この間言われた」
どう話していいのか戸惑(とまど)った様子で、ひとつひとつ言葉を紡(つむ)いでいく。
その肩越しに遠く、白と赤と青の回転筒がくるくると回っているのが見える。
桃子ちゃんの生花店と、もう一軒を挟んだ並びの、薫ち

やんの家。十河理髪店（そごうりはつてん）の看板。

初穂はようやく、事情がのみこめてきた。

薫ちゃんのところの床屋さんは、歳の離れた薫ちゃんのお兄さんが跡を継いでいる。けれど、一家で営んでいるので薫ちゃんもゆくゆくは鋏を握る心構えでいるのだ。

もちろんお客さんの髪を切るのはきちんと修行をして大人になってからだが、買い物や片づけといった手伝いは小学校のころからこまめにこなしている薫ちゃんだ。その甲斐もあって、お店の設備を使っての練習をしていいという許可がおりたというわけなのだろう。

「えっ……で、でも、いいの？　わたしの髪の毛なんかで」
それこそ、お兄さんとか家族のひとに相手になってもらったほうが、終わった後でアドバイスとかだってもらいやすいだろうに。わたしなんかじゃ、そのあたりお役に立てそうにない。
「いい」
けれども、薫ちゃんは間をおかずに首を縦に振った。
短いその声のあとで、握った手を唇にあてて、咳払(せきばら)いをしかけたようなポーズでしばし静止する。
唇を塞いでいるからか、色白な顔にかすかに赤くなり、

線の細いほっぺたがすこしだけ膨らむのが見えた。
「その、いい、というのは初穂でもいいという意味ではなく、初穂がいいという意味」
こころもち早口で言葉を加えてから、眉を八の字にしたまま薫ちゃんは目をつむった。
「はじめてひとの髪を洗うときと、はじめてひとの髪に鋏を入れるときは、初穂に来てもらうと前から決めてた」
「えっ、ええっ？　そんな、なんか照れちゃうな……」
薫ちゃんが自分をそんな光栄な席に呼んでくれるのがどうしてなのかはわからないけれど、こう、うれしさのとち

よっとの恥ずかしさで、ほっぺたが熱を帯びてしまう。
背筋をしゃんと伸ばし、自分の髪の上に置かれた薫ちゃんの手の甲にぽん、と手を重ねて、初穂は神妙に唇を結んだ。
「うんっ――じゃあ、わ、わたしでよかったら、よろしくおねがいしてもいいかなっ……！」
湯船につかっている間に考え事をして帰ってこなくなってしまうのは自分の悪い癖のひとつだと、お風呂あがりに初穂はいつも思う次第である。

「ふあー……」

脱衣所に出た足取りが、すこしおぼつかない。かごから取ったバスタオルではだかの身体を拭うけれど、火照(ほて)りあがってしまっているせいか汗が浮かんでくるほうが早いくらい。

特にこう、さっきのことを思い出したら照れまで一緒によみがえってしまったこともあって、ほっぺたの内側の熱はなかなかひいてくれなくて。

頭からタオルをかぶると、初穂はぼんやり、洗面台の鏡の中の自分に目を向けた。

ぺたんこで頼りなげな、中学校にあがってもう半年になるのにいまだ子供のままの身体。
きょとんとしたどんぐりまなこだけが目立ってしまう、やっぱり頼りなげな表情を浮かべた顔。
ほどいた髪の毛のひとふさを手にとって、初穂はいまいちどため息をつく。
――ああは言ったけど――いいのかなあ薫ちゃん、ほんとにわたしなんかで……
練習とはいえ、薫ちゃんの床屋さん人生の貴重な節目――というか、はじまりといってもいい局面だ。ちいさなこ

ろからの友達とはいえ、自分がそんなところに立ち会わせてもらっていいのか、悩んでしまうばかりなのである。

とはいえ。

薫ちゃんがあんなに真剣に告げてくれて、それに対して首を縦に振った以上は、できるかぎり薫ちゃんの力になりたいわけで。

とはいえ、とはいえ。

薫ちゃんの初めての洗髪の相手になるにあたって、どうしたら薫ちゃんの力になれるのかというのは、なかなか見当がつかないことであって。

――や、やっぱり、洗ってもらう前にちゃんと髪の毛、お風呂入ってきれいにしていったほうがいいのかな……

かぶったバスタオルでわしわしと髪をぬぐいつつ、初穂は考える。

けれどもそれは、なんだか矛盾したことのような気もする。お医者さんに行く前にちゃんと元気になろう、みたいなのと同じことになってしまうのではないか。

――薫ちゃんが洗いがいがあるように、前の日は髪の毛洗わないほうがいいのかなあ。

それはそれでなんだか恥ずかしい。薫ちゃんはあまり思

ったことを口に出さないだけに、心の中でひそかに『あ、初穂は普段あまり頭洗わないんだ』なんて思われてしまったらことなのだ。

うむむ。

バスタオルを頭に乗せたまま、裸の胸の前に腕を組んで初穂は唇をへの字にする。

わからない。

自分がひとさまにお茶を淹(い)れるようなときというのはまだ、その相手のためになりたいという気持ちをどうやって行動にこめていくか、その道筋をすこしはつかむことがで

きるのだ。丁寧にお茶を淹れるとか、茶托やお湯呑みを置く仕草を穏やかにするとか。できているかはともかくとして。

ところが今回のような、受け身というか、ひとにしてもらうほうになると――できるだけおとなしくして薫ちゃんがやりにくくないようにするくらいしか、たすけになるやりかたが思いつかない。

――今日のわたしのはじめては、薫ちゃんがたすけてくれたのにな……

緊張でぎこちなくなってしまっていたところに薫ちゃん

が声をかけてくれたからこそ、リラックスして、いまの自分の中では最良に近い一杯をふるまうことができたのだ。

薫ちゃんがはじめての洗髪で緊張するものなのかはわからないけれど、もしそうだとしたら、できるだけその緊張を和らげてあげたい。

鏡の中に映る火照(ほて)った自分の顔とにらめっこをするように、初穂は真剣に唇を引き結ぶ。

『初穂ー』

脱衣所の外、廊下の向こうから呼ぶ声が聞こえてきたのはちょうどその時だった。

『大丈夫かい？　お風呂、またずいぶん長いけど』
「だいじょうぶだよー！　もうあがってるってばー！」
もう、すぐ心配するんだからお母さんは。
一瞬そう思って頬をふくらませたものの、脱衣所の棚のうえに置いたちいさな時計が示す時刻はもう十時十分前だ。お風呂に入ってからもう二十分以上経つわけで、それはまあ声もかけられようというものである。
「……うー」
ぴとん、と、初穂は両手で自分のほっぺたを叩いた。
自分はどうも、いちど考えはじめるとどんどんぐるぐる

同じ場所を巡ってしまうのがよくない。
薫ちゃんに聞いた、洗髪の練習をする予定の日は、十河理髪店の定休日である来週木曜日の夕方。いまからはまだ八日間も先なのだ。
今日のところはいちどおいておいて――とりあえずパジャマに着替えて、ほうじ茶でも淹(い)れよう。
お茶を飲んでリラックスしたら、緊張がほぐれていい考えも浮かんできちゃったりするかもしれない。
そう。
お茶を、飲んで、

緊張を、ほぐして、リラックス――

「……ん？」

唇に指をあてて、初穂はきょとんとひとつまたたきをして。

次の瞬間、思わずはねあげた頭からバスタオルがばさりと翻って床に落ちた。

「――あ！」

◆

とたとたとたとたっ！　という足音が廊下を急接近してくるのを、一之江（いちのえ）若葉（わかば）は耳にした。

ちょうど台所で、洗い終えた二人分の食器を水切り籠（かご）に置いたタイミングである。

「こら初穂、夜遅くにそんなばたばたと」

「お母さんお母さんお母さん！」

発しかけたたしなめの言葉をのっけから打ち消して、ぱんっ！　と踏みとどまる裸足の足音と声とが真後ろに響く。

ちらりと後ろにまなざしを向け、戸口に立つ娘の姿を認めると、若葉はひとつため息をついた。

――この娘(こ)のこういうとこは、誰に似たのかねえ……
などとぼやいてみても、遺伝子の一端を担った相方は生前わりと物静かで堅実な人間だったので、彼岸(ひがん)の向こうに責任をおっかぶせるわけにはいかず。
「なんだい」
苦笑を浮かべつつ、若葉は問いを返した。
「あ、あの――えっと――
今度ちょっと、お茶の道具のセット、少しのあいだ借りてもいいかな！　急須とお盆と、お茶碗ふたつ！」
まだ息のあがった様子で、台所の戸口に立った一人娘の

初穂は胸の前にぎゅっとげんこつを握り締める。
「ん？　いんや、構わないけど――どうした、デートにでも持ってくのかい」
「え？　ふぇえ、違うってば」
お風呂上がりの火照(ほて)った顔をさらに真っ赤にして、初穂はぶんぶんと首を横に振った。
「そのっ――ちょっと、薫ちゃんのうちに持っていって、薫ちゃんにお茶を淹(い)れてあげたくって……
あ！　お茶っ葉も持っていくけど、それはちゃんとわたしがお小遣いで買うから！」

「？　や、それはいいけどさ」
くるりと娘のほうを振り返り、流しに寄りかかりつつ若葉は首を傾げた。
「薫ちゃんとこ？　んだったら別に、お代なんてけっこうだよ。あたしがおごったげる」
初穂の友人――ことさらこの横丁と商店街の娘さんたちが遊びにきたときは、お世話になっているお礼にお茶くらいは普通にふるまっているつもりだ。逆に初穂がふるまいに行くにせよ、それに使う茶葉くらいけちけちするつもりはない。

が――

「だめ！」

居間とくっついた台所に、間髪入れず初穂の声が響いた。

いつになく強い語調にこちらがきょとんとしたのがわかったのだろう。初穂ははっとした表情を浮かべ、すこし恥ずかしげにうつむいた。

「ご、ごめんっ……

でも、これは、お茶っ葉はほんとに、わたしが買う」

うつむいたけれど、まなざしは上目づかいにこちらを見つめて。

すう――という音が聞こえるほどに、初穂は息を吸い込んだ。

「そうじゃないと、意味がないから！」

「――――」

自分の娘の、反らした胸とこちらを見すえるどんぐりまなこを、若葉はしげしげと見やった。

――ほう。

唇の端から、知らずちいさく息が洩(も)れる。

真っ赤になった、自分の娘の顔。アルファベッドのMの字を緩やかにしたような形に閉じられた口。

「そっか」
短い髪を指で掻(か)きながら、若葉はひとつ息をついた。
初穂の言わんとしていることの意味は、実際ちんぷんかんぷんだ。どうして自分のお金で茶葉を買わなくてはいけないのかも、そもそも何のために薫ちゃんの家にお茶を淹(い)れに行くのかも。
すぐにいっぱいいっぱいになるので、基本的に説明は下手な子なのである。
けれども。
「ん――じゃあ、そうするといい。自分で買ってくんだっ

たら、茶葉の種類も好きなの自分で選びなよ」
初穂が真剣であることだけは、まなざしと、いま耳にした声の勢いから十分に察することができて。その真剣さの方向がたぶん間違ってはいないことも、まあこれは親としての勘みたいなものだけれど、なんとなく読み取れる。
ならばまあ、それ以上とやかく言うこともないだろう。
あっけなく自分の言葉が通ったことに拍子抜けしたのか、初穂は一瞬呆(ほう)けたような表情を浮かべ、
「う――うんっ！」
けれども、ぎゅっと眉をしかめて力強くうなずいた。

おやおや――と、若葉は目を細める。

この娘のどこからどこまでが自分とあの人のどちらに似たのかは、やはりわからない。

がさつではすっぱなところが見た目にも出ている自分と違い、おっとりした雰囲気なのはたぶんあの人に似たのだろう。

ただ。

何かについてこうと決めると一本気で頑固で真剣なところはこう、あたしとあの人の両方から受け継いだところなのだろうなあと、すこしばかりこそばゆげな嬉しさとも

に若葉は思うのだ。
ああ、それと。
ほっとしたように細い肩を落としたちいさな身体を見やり、若葉は苦笑した。
あたしの側に、確実に責任があるところがひとつある。
「ところであんたさあ、初穂」
溜息混じりの声で、若葉は切り出した。
娘の、自分にそっくりな場所。
もう年頃を迎えたというのに一向に膨らみを見せないぺったんこな胸を、その肌を見やりながら。

「なんか急ぎの用だったのはわかるけどさ――パンツくらい履いてから来たらどうだい。風呂あがりに素っ裸で廊下走って台所に駆け込むなんざ、許されるのは小学生までだよ」

「うぇ？　……あ、わわわわわ！」

どうもわが娘は、いまのいままで自分がまるはだかであることを意識すらしていなかった様子だ。

まだお風呂上がりの赤みがほんのり残る身体を見おろすと、うわずった悲鳴とともに自分の肩を抱いてしゃがみこむ。

……いや、はだかでそんな風にしゃがみこむのは余計にやめたほうが賢明だと思うのだけれど。

「ほら、とっとと寝間着に着替えてきな」

突然の行動不能に陥ったひとり娘に笑みを投げて、一之江 若葉は肩をすくめた。

「まだ週も半ばだってのに、そんなハイテンションじゃ眠れないだろ。ほうじ茶でも淹(い)れてやるよ」

◆

とさり、と、初穂は布団のうえにお尻を落として――
そのままあおむけ大の字に、両脚をあげて倒れこんでしまう。
今日はいろいろあったなあ、とはさっきお風呂場でも思ったことなのだけれど、なんだかさらに上積みがされてしまった感じで。
背中を通して、心臓の音が布団に響いてしまう気がする。
お店の二階にある、自分の部屋。
すこし色あせた壁と、年季の入った板張りの天井。小学校のときから使っている勉強机に、お祖母ちゃん譲りの

洋服箪笥(ようふくだんす)。

寝る前に布団の中から毎日見あげる風景も、今夜はどこか、いつもと違った真新しさを帯びているようで。

その視界の隅に見える掛け時計は、もうすぐ十一時に差し掛かろうとしていて、さすがにそろそろ寝ないと明日またどこかで居眠りをしてしまいそう。

ゆっくりとひとつ、初穂は深呼吸をした。

たったいま歯磨きをしてきたところではあるのだけれど、深く息を吐くと、喉の奥にはほうじ茶の穏やかな香りが残っている。

お母さんが淹(い)れてくれた、寝る前の一杯。
さっきまでばたばたしてへんてこに高まってしまっていた胸の内が、ふんわりとほどけるような。
やっぱりお母さんの淹(い)れるお茶は違うなあと、初穂はあらためて思うのだ。
なんだかすごく、ほっとする味。
ちいさいころからずっとそう感じて、憧れていたから――さっき薫ちゃんが自分のお茶に言ってくれた「ほっとする」という言葉が、なによりうれしかったのであって。
――来週の木曜――わたしにも、できるかな……

パジャマの胸元をぎゅっと握りしめ、初穂は口元に笑みを浮かべる。

不安はあるけれど、することがはっきりしたぶん、さっきまでよりずっと自分の中の芯がしゃんとしてきていた。

どうしてもっと早く思いつかなかったのだろう。

自分に薫ちゃんにできることといえば、やはり、お茶を淹(い)れることしかないのだ。

頭を洗ってもらう前に――薫ちゃんの「はじめて」の前に、あったかいお茶を一杯飲んでもらって、リラックスしてもらうことができたなら。

布団の上から身を起こし、初穂は窓際に歩み寄る。
カーテンと引き戸をそうっと開くと、窓の外には連なる屋根。
入り込んできた秋の夜風は、まだすこし火照(ほて)りの冷めない頬に涼しい。
初穂のお店があるこの春日横丁(かすが)も、駅から伸びる春駒通(はるこま)りも、旧い商店街なので夜は早い。この時間はもうすっかり寝静まっていて――連なる古い家屋のシルエットのなか、駅の高架の照明と路の街灯はほの白く、ところどころ開いている居酒屋さんの提灯(ちょうちん)と店の灯りは赤と橙に、穏やかに

町を彩(いろど)っている。
その秋の夜の影絵の中――ちょうど正面遠くに見えるちいさな四角い明かりに、初穂は目を向けた。
横丁の並び、初穂の家のお隣と、そのお隣の桃子ちゃんの花屋さんは奥に長い平屋造り。
なので、初穂の二階の部屋の窓からは、三軒先の薫の家が見えるのだ。
――薫(かおる)ちゃんも、まだ起きてるんだ。
薫の家には数えきれないくらい遊びに行って宿題とかも一緒にやっているので、間取りまでよくわかる。

二階のあの窓は、薫ちゃんの勉強机の真ん前にあるはずで。

もちろんカーテンが引かれているし、お向かいといっても十数メートルの距離はあるのだけれど。それでも、あの明かりの中に薫ちゃんがいて――もしかしたら再来週の木曜日のことを考えていたりするのかもしれないと思うと、なんだかちょっと不思議な気持ちになる。

いつもは無口で、ちょっと眠そうに二重の瞼（まぶた）をおろした、けだるげだけれど凛とした幼馴染。

今日はなんだか、これまであまり見たことのない薫ちゃ

んの表情をたくさん目にした一日で。
来週の、木曜日。
薫ちゃんのはじめての日も、もしかしたらまた、いつもとちがう薫ちゃんをたくさん見られることになるのかもしれない。
とびっきりのお茶を、持っていこう。
お茶の匂いと味は、何かがほどける匂いと味だと思うから。
薫ちゃんの緊張をほどくことができるように。薫ちゃんの何かをほどいて、そして、結ぶことができるよう。

近くて遠い窓明かりを見つめて、初穂は唇を綻(ほころ)ばせる。
――おやすみ、薫ちゃん。
胸に呟いて引き戸を閉めるその時、夜風の中に、ちいさな踏切の音が聞こえてきた。
その音から始まった今日の長い夕と夜との、締めくくりを告げる響きにあわせて――そっと幕を引くように、初穂はカーテンを閉めたのだった。